

評者

廣光 俊昭*1

亀田 達也 著



『モラルの起源 実験社会科学からの問い』

岩波書店 2017年3月 定価760円(税抜)

本書は、我が国の社会心理学の第一人者である亀田達也教授が、道徳の由来に迫るこれまでの研究成果を一般向けにまとめたものである。著者は、人間は自然環境に適應する手段として群れを選んだ結果、今度は群れの中でどう生き残るかについて新たな適應問題が生じたとし、この小集団における適應という視点が、人間行動を考える上で本質的だとする。人間行動の解明という課題に、本書は実験という手法を用いて迫っていく。実験とそれを解釈していく著者の手捌きに、読者は魅了されるだろう。

ミツバチと人間：本書での実質的な議論は、ミツバチと人間の集団的意思決定の違いの話からはじまる。ミツバチが巣の引っ越しを準備する際、多数のハチが巣を飛び立ち候補地を探索する。候補をみつけたハチは巣に戻ってダンスを踊る。候補が良質なものであるほどダンスは長く熱心なものになるらしい。個々のハチは限られた認知能力しかもっていないが、多数のハチを送り出すことで複数の候補の質について情報が蓄積されていき、最終的な引っ越し先が決まる。この過程を通じ、ハチは客観的にみて最良の移転先を非常に高い確率で選ぶことができるという。

「三人寄れば文殊の知恵」を地でいく例である。このような「集合知」が人間でも機能しているか、本書はサルガニクらによる実験を紹介している。彼らの実験では、サイト上で未知の曲から選んでダウンロードする設定のもと、他人がなにを選んでいるかわかる状況（社会条件）とわからない状況（個人条件）で、各曲が選ばれる頻度を比べている。その結果によると、社会条件での選択は個人条件よりも偏りが大きかった。そして、社会条件で人気の曲は（個人条件でより選ばれた曲がよりよい曲だとの前提に立つ限り）必ずしもよい曲ばかりではなかったという。人間での集合知に疑念を抱かせる結果である。ミツバチと人間のこの違いは、ミツバチでは他の影響を受けることなく、その個体の判断をそのまま表現するのに対し、人間ではその判断が他の影響を受けてしまうことにあるとい

う。群れの中での生き残りのため、人間は他人がどう思っているのか気になってしまう生き物なのだ。

ミツバチとジャン＝ジャック・ルソー：「人民が十分に情報をもって審議するとき、もし市民がお互いに意思を少しも伝えあわないなら、その決議はつねにいいものであるだろう」「ある法が人民の集會に提出されるとき、人民に問われていることは、正確には、彼らが提案を可決するか、否決するかということではなくて、それが人民の意志、すなわち、一般意志に一致しているかいなか、ということである。各人は投票によって、それについてのみずからの意見をのべる」（『社会契約論』：傍点・下線評者）。

評者がルソーを持ち出したのは、彼の一般意思が正しく表明される前提条件である「市民がお互いに意思を少しも伝えあわない」ことが、ミツバチで集合知が発揮される条件と酷似していることを指摘したかったからである*2。ルソーは二つ目の引用に続けて「だから投票の数を計算すれば、一般意志が表明されるわけである」と書いている。社会にとってなにがよいか、個の考えを集計する過程として投票を理解するとして、各人がミツバチのようにふるまうなら、投票は正しく一般意志を表明するのである。

実際には人間がミツバチとは異なり、他人から影響を受けてしまうことは既にみた通りである。人間において集合知がどの程度妥当するのか、興味をもった読者は同じ著者による『合議の知を求めて』（1997年）をあたってみるとよい。同書の実験が明らかにするのは、「一般的に、課題に対する“解”の自明性・説得性の程度が低くなるほど、その解がグループの決定となるために必要な初期支持者の数は増大する。解の正しさが外的に（中略）保証されない意思決定過程では、初期多数派（中略）主導型の社会的変換過程が生じやすい」ことである。なにが正しいか自明ではない問いであるほど、合議前に多数派だった意見が一段と力を得やすいというわけである。

さて、算数の問題ならまだしも、本評の読者の多くが

*1) 財務総合政策研究所客員研究員

*2) 人間がミツバチのように振る舞った場合の集合知についての科学的報告は、F. Galton (1907) を嚆矢とする。

関心を寄せる公共の決定の場合、正答の自明性はいかばかりであろうか。おまけに、子を残さない働きバチと違い、人間では個の利益は群れの利益と完全には一致しないことから、個の判断が群れの利益を考えた判断である保証はない。人間は「それが人民の意志、すなわち、一般意志に一致しているかいなか」を素直に投票で表明するとは限らない。公共の決定は、個の判断の独立性の不足、個の利己性という二重の意味でミツバチから隔たっており、ルソーは図らずもそのことを教えてくれている。ここまでくると、不在の将来世代を含めた社会全体の利益を視野に収めねばならない問題にまでなると、合議が正しい答えを導くことができるのか、一段と注意深い検討が必要になることが理解できるだろう。

利他性を支えるもの：『モラル』の後半は、この問いへの手掛かりを考える格好の材料を提供している。利他性を支えるものとして、著者は1) 社会教育、2) 制裁装置、3) 評判に基づく間接互惠性、4) 共感、5) 正義を挙げ、これらの進化上の基礎付け、実験による検証、脳神経学上の基盤などについて見通しのよい説明を与えている。

なかでも評者が重要と考えるのは、共感には自他融合型の共感だけではなく、内輪を超える認知的共感があるとの指摘である。目の前で困窮している者に共感することはたやすいが、人は多様な他者と視点を交換し共感する能力までも持つというのである。異質で遠く離れた者への共感、同時代の多様な他者さらには時を隔てた未来の人々と concern を共有する基盤となるかもしれない。正義を論じた箇所では、正義を支える独自の神経基盤があるらしいという研究に触れている。それは眼前の困窮に共感する神経基盤とは異なるものであるらしい。ならば、制裁がなくても、評判を気にせずともよい状況でも、自他融合的な共感の働きにくい状況でも、正義それ自体にコミットすることが、理屈上は可能であることの証左となりうる。

『モラル』は、著者らによる、未知の三人への配分あるいは三種の帛結を持つくじからどれを選ぶか決める興味深い実験を報告している。最終的な選択自体は様々な基準（功利主義やロールズ主義等）に沿って行われていたものの、不遇な状態は全参加者の思考プロセスにおいて最も高い注意の対象となっていたことが明らかにされている。

実装に向けたヒント：ここで焦点は再び集合知の問題に戻る。果たしてこの認知的共感や正義は、『合議』のいう初期多数派への同調圧力に比べても十分に強

いものなのだろうか。言葉による説得を通じて規範が変わることに関する神経基盤の存在を示唆する興味深い研究^{*3}も存在するが、それ以上の脳神経学上の答えは評者の現在の力の及ぶものではない。ただ、楽観は戒めておくにしくはない。財政政策を題材に評者の実施した討議実験でも、討議が世代間の分かち合いによる政策の選択を促すことが示されたものの、結果を細かくみると同調圧力によって分かち合いが促進されたことも示唆されていた^{*4}。

社会実装を考えるなら、この必ずしも十分に強力ではないかもしれない利他性に力を与え、意思決定でより大きな役割を果たすべく担保するよう社会を設計することの重要性が浮かび上がる。『合議』では、合議過程に工夫することで合議のパフォーマンスがどう変化するか検討し、集団の意思決定を支援する仕組みのあり方を論じている。高知工科大学/総合地球環境研究所の西條辰義教授を中心とする研究者による「フューチャー・デザイン」の取り組みも、この設計の重要性という考えを、長期の公共問題の決定の場で具現化しようとする取組みである。西條教授らは、岩手県矢巾町など自治体と協働し、まちづくりに「仮想将来世代」という将来世代になりきって意見交換に参画する住民を導入することなどを通じ、興味深い成果をあげている^{*5}。

『モラル』は実装に向けたもうひとつのヒントを示唆している。「メタモラル」の構築である。自然な感情を基盤とする「自動モード」による問題の処理とは異なる、「手動モード」に着目する議論である。手動モードとは、各政策が社会としてどれだけの効用をもたらすか計算し、高い効用を生む政策を妥当とする功利主義の手続きのように、冷静な考慮を持ち込むことで、身近な群れの壁を超えて誰もが理解できる共通の基盤を作り出す取組みである。

「倫理判断を下すさいには人は自分自身の好き嫌いを越えるということであ」って、「倫理規準に従って生きるという観念は生き方を擁護するという観念、生き方のための理由づけをするという観念、ひいては生き方を正当化するという観念と結びついている」。ここではピーター・シンガーから言葉を借りた。そもそも連綿とつづくモラルを巡る問い自体、人間社会の拡大にあわせて自然な感情の限界を乗り越えるために営まれてきたものである。

政策の実務担当者にとっても本書『モラルの起源』から得るものは小さくないはずである。

*3) Yomogida, Matsumoto, Aoki, Sugiura, N. Phillips & Matsumoto. 2017. *The Neural Basis of Changing Social Norms through Persuasion. Scientific Reports.*

*4) 『実験の手法による長期の財政問題の解決に向けた手掛かりの考察』(2017年)。PRI Discussion Paper series 17A-08.

*5) 高知工科大学フューチャー・デザイン研究所HP (<http://www.souken.kochi-tech.ac.jp/seido/index.html>) でこれまでの成果を参照することができる。